

(空白)

は、従来の大陸考古学の常識からみてもとうてい認容できぬ数字であるとして、学界の大部分からは批判された。

1950年以来、ウィラード・F・リビーによって放射性炭素による年代測定が開発されたが、その「Radiocarbon Dating」第2版（1955）には、日本から送られた試料の測定結果も収録されるにいたり、縄文土器の実年代にかんする問題はここにあたらしい局面を迎えたのである。

C-548	姥山貝塚出土の木炭	4,850 ± 270年 BP
		3,938 ± 500年 BP
		A v. 4,546 ± 220年 BP
C-603	姥山貝塚出土の木炭	4,513 ± 300年 BP
C-688	検見川出土の丸木舟	3,052 ± 200年 BP
		3,277 ± 360年 BP
		A v. 3,075 ± 180年 BP

がそれらの測定年代であった。姥山貝塚は縄文時代中期の代表的貝塚であり、したがって中期の年代が約4500年前、また検見川出土の丸木舟は縄文時代後期に属するとみられていたのが、後期の年代が約3000年前ということであった。さらに同じ頃千葉県加茂遺跡出土の縄文時代前期の丸木舟破片は

M-240	千葉県加茂出土丸木舟	5,100 ± 400年 BP
-------	------------	-----------------

と測定された。これによれば、縄文時代前期は約5000年前ということになる。

放射性炭素の測定によってもたらされたこれらの実年代について、この程度なら従来の考えかたと大きく矛盾することもなさそうなので、日本の考古学界もほぼこれらを認めようとする態度をみせた。山内清男でさえも、縄文前期5000年前、中期4000年前、後期3000年前という年代をこの時点では認めていたようである。この程度 of 古さであれば、大陸における既知の新石器時代土器の伝播によって縄文土器がうまれたとする従来の考え方にも支障をきたすことがなかったからであろう。

ところが、神奈川県夏島貝塚第1貝層から出土した木炭および貝殻の年代がミシガン大学において測定され、

M-769	9,450 ± 400年	夏島貝塚第1貝層出土のカキ殻
M-770, 771	9,240 ± 500年	夏島貝塚第1貝層出土の木炭

という結果が昭和34年4月になって発表されていらい、放射性炭素測定による年代はとうてい認めるわけにいかないとする考古学者の強硬な意見があらわれることになった。さらに、昭和35年いらい3ケ年にわたって筆者と鎌木義昌とが発掘調査した長崎県福井洞穴第3層の隆線文土器に伴

出した木炭からは、

Gak-949	12,400 ± 350 年 BP	福井洞穴第3層出土の木炭
Gak-950	12,700 ± 500 年 BP	福井洞穴第3層出土の木炭

という更に古い年代がえられた。なおそれよりすこし以前に、愛媛県上黒岩第9層の隆線文土器に伴出した木炭からは、

I-944	12,165 ± 600 年 BP	愛媛県上黒岩岩陰第9層
-------	-------------------	-------------

という年代がえられており、両者とも日本最古の隆線文土器にかんする年代として重要な意味をもつことになった。ところが、夏島貝塚第1貝層の年代さえ極端に古すぎるとする立場からみれば、1万年をこす古さの土器が日本に存在するなどと考えることは、まさに狂気の沙汰としかみえなかったようである。

「中期姥山の木炭に対して前2500年、前期後半加茂の舟に前3200年等の年代が与えられた。しかし夏島の前7000年が示されるに至って、これは頂けないのではないかという疑惑を持つに至った。土器を持つ文化がこれほど古いとはまともに考えられない。私は考古学本来の年代決定へ奮起した次第であった。そしてついに縄文前2500年説に達したのであった。一方考古学を科学に従属せしめようとする勢力は強く、図に乗った科学者はついに福井洞穴第3層（隆線文）にB. P. 12,700 ± 500（物理学者は1950年をリビー記念の新紀元と定め、それ以前の年代をB. P.即ち Before Physicsの略と俗称している）、同じく隆線文土器を出す上黒岩第9層もこれに近いB. P. 12,165 ± 600と土器を有する新石器時代として世界未曾有の古さを示すに至った。……かくのごとく神武精神の考古学版がまかり通ったのは遺憾ながら事実である。考古学的に言えば極端な年代のインフレーションといってよいし、high-chronologyの盛行、肇国精神、ナチのゲルマン民族理編に通ずるといってもよい。」（山内 1969）

という激しい非難がくりかえして発せられた。このようなC-14年代不信の根底にあるものは、既製の大陸考古学の常識から生じた年代観である。新石器文化の発祥地とされている西アジアにおいては、最古の土器の年代はBC 6000年ていどであり、またより日本に近いシベリア最古の土器はBC 4000年紀、中国ではBC 3000年紀といわれている。したがって、それらの土器の一部の伝播によって成立した日本の縄文土器の年代は、いかにしてもBC 3000年をこえるはずがない、こえてはならない、というのが山内清男を代表者とする考古学研究者の考えかたであった。

東アジアにおける土器出現年代についての私の考えかたは、叙上の山内説とはまったくちがっており、むしろ山内説にまっこうから対立するものである。私見によれば、土器製作の問題は、旧石器文化から中石器文化さらに新石器文化へと発展する石器時代全般の文化の流れのなかで把握されなくてはならないものである。日本では後期旧石器文化から晩期旧石器（もしくは中石器）文化、

さらに新石器（縄文）文化へと発展する過程が、岩宿遺跡発見以後20年以上にわたる研究によってかなり明らかになりつつある。実年代でいえば約30,000年前から2,500年前までのことであり、地質学上からみれば洪積世の終末から沖積世にかけてのできごとということになる。この期間の石器時代文化の推移が、日本ではほぼ間隙なく迎えられるまでになっており、土器製作の発現時期はそのなかでの約12,000年前、ちょうど晩期旧石器（もしくは中石器）文化に該当し、むしろ新石器（縄文）文化よりは先行するのである。最古の土器は隆線文土器とよばれ、長崎県福井洞穴第3層、愛媛県上黒岩岩陰第9層などから出土している。この隆線文土器は、旧石器文化の伝統をつよく残す細石刃や有舌尖頭器を伴出し、さらに石製有孔円版や刻線礫といわれる人間を表現した特殊な遺物をもともなっている。これらは新石器（縄文）文化のなかにはまったく認められない遺物であり、層位的にも早期縄文土器層よりつねに下位にあることも確認されている。したがって日本では、細石刃や有舌尖頭器が用いられていた晩期旧石器もしくは中石器時代において、はじめて土器製作がおこなわれたのであって、C-14年代の測定によってそれらの出土層が約12,000年の古さにあると判明したところで、考古学上からいささかも矛盾するところがないわけである。

ただここで問題とされるのは、大陸の石器時代文化との関連であろう。中国、朝鮮、シベリアなど日本周辺の諸地域において、日本の隆線文土器に匹敵するほどの古さの土器が存在しないことが確実である場合には、日本だけに世界最古の土器が孤立して出現したことになり、やはり考古学上からみて不合理といわざるをえないであろう。まず中国をとりあげてみると、中国では最古の土器は新石器時代の彩陶だといわれており、推定年代はほぼBC 2,500年とされていた。しかし、最近では彩陶層の下層から更に古いと考えられる北首嶺下層とか元君廟出土の資料が発見されており、細石器文化として知られていたジャライノール文化にも土器が伴出する事実が知られるに至った。しかも、ごく最近の発表によると、彩陶文化の中でも古い時期に属する西安半城から出土した木炭から、 $6,080 \pm 110$ 年BP、 $5,920 \pm 105$ 年BP、 $5,855 \pm 105$ 年BP、 $5,600 \pm 105$ 年BP、というC-14年代がえられており（郭 1972）、彩陶の年代は従来の通説よりもはるかに古く、6,000年BPまでさかのぼることが判明した。そうすると、彩陶以前と考えられる北首嶺下層、元君廟、ジャライノールなどの土器は、当然6,000年BPよりもさかのぼる筈である。ここで問題になるのは、中国の後期旧石器時代終末期から新石器時代へのつながりが、まだ未解決のまま残されていて、約13,000年BPから6,000年BPまでの間が考古学上の空白になっていることがある。約7,000年間のこの空白の時期に何がかくされているのか、はなはだ興味深いところである。おそらく日本で最近あきらかにされたように、この空白期間の前半にあられるのは、細石刃と土器との組合わせであり、後半は石鏃と土器の組合わせであり、農耕の発生も後者に関連してくるであろう。中国考古学の進展は最近とくに目ざましいものがあり、遠から

ずこの空白は埋められる筈である。そのときになってはじめて、日本と中国との土器発現の古さの問題が、十分な資料をもって対比されることになり、隆線文土器の由来もおのずから解決されることであろう。朝鮮、シベリアにканしても同様である。

ここでもうひとつ言及しておきたいのは、土器の発明が西アジアの新石器文化発祥地においてなされ、それが旧世界各地に伝承したという古い考えかたは捨て去るべきこと、また、土器の発明は一カ所だけでおこなわれたのではなく、むしろ多元的なものであったと考えた方がよさそうであることである。東アジアにおける土器の発現は西アジアの問題とは一応切りはなして処理すべきであり、従来のように西アジアにこだわっているかぎり真の解決はあり得ないであろう。

東南アジアにおいても、最近の発表によれば、タイ国の仙人洞から非常に古い土器の発見がつかえられており

Gak-1,846 8,500 ± 200年BP タイ仙人洞第2層の表面に掘られた炉（土器片伴出）というC-14年代がえられている。この仙人洞では、下層の第4層からはマメ類、ウリ類、ヒョウタン、コショウ、カンラン、ビンロウジュ、スモモ、アブラギリ、ヒシなどの炭化した種子が採集されており、その年代は9,180 ± 360年BPからさらに最近では10,910 ± 580年BP（FSU-316）までさかのぼることが明らかにされている。タイでは、10,000年以上前からこれらの植物の半栽培がおこなわれていたのではあるまいかとC. F. ゴーマン（1969）は述べている。

C-14年代が考古学者の予想もしくは推定年代から大きくかけ離れたとき、私たちはそれを頭から否定するまえに、考古学上の空白がそこにあったかどうかを反省する必要があるのではなかろうか。もしも、考古学的方法による編年がそこに完成されていて、かけはなれたC-14年代をうけいれる余地がまったくなかったなら、当然のこととして測定上の誤りが考えられるであろう。しかし、東アジアあるいは東南アジアにおける土器の発現時期もしくは農耕の開始期についての考古学的研究はまだまだ未完成であって、とくに洪積世の終末から沖積世初頭にかけての研究が充分におこなわれている地域は皆無といってよい。日本はその時期だけに関しては、他の地域よりも研究が比較的すすんでいるといってよい。C-14年代測定件数もまた同じであろう。物理学の側では、C-14年代の補正について着実な研究が進められているのであるから、私たち考古学の側としては、考古学的方法による相対編年を完成させるのは勿論のことであるが、他方ではC-14年代による編年網を作製するための確実な資料を発掘によって集積することが必要であろう。考古学的方法による相対編年と、物理学的方法による絶対編年とがあるていど完成されたときには、現在のような無用の混乱は消滅してゆくのではあるまいか。

引 用 文 献

- Gorman, C. F. 1969 Hoabinian: A Pebble-Tool Complex with Early Plant Associations in Southeast Asia. Science, 163, 671~673.
- 後藤守一 1943 先史時代の考古学, 東京
- 郭沫若 1972 古代文字之弁証的發展 考古, №3, 2~13
- Libby, W. F. 1955 Radiocarbon Dating (2nd ed.), Chicago
- Milne, J. 1880 Notes on Stone Implements from Otavu and Hakodate, with a few General Remarks on the Prehistoric Remains of Japan. Transactions of the Asiatic Society of Japan, Vol. VIII, 61~91.
- 山内清男 1969 縄文草創期の諸問題 Museum №224, 3~22.